

平成 27 年度第 1 回（社会福祉・社会・統計）分野連携グループ合同委員会議事概要
学系別 F D / I C T 活用研究委員会（社会福祉学）
サイバー・キャンパス・コンソーシアム運営委員会（社会学・統計学グループ）

- I. 日 時：平成 27 年 10 月 25 日（日）16：00～19：00
II. 場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）7 階 吉野
III. 出席者：社会福祉学
山路委員長、戸塚委員、井上委員（ネット参加）、天野アドバイン
社会学
土屋委員、犬塚委員、干川委員
統計学
今泉委員（座長）、渡辺委員、竹内委員、村上委員、中西委員
事務局 井端事務局長、森下、平田

III. 議事概要

1. 出席委員の紹介と座長の担当者確認

委員会開催にあたり、社会福祉・社会・統計分野の各委員の自己紹介が行われ、進行役の座長は統計学の今泉委員に担当いただくことを確認した。

2. 報告・検討の概要

(1) 平成 27 年度の事業計画の説明の後に平成 26 年度の事業報告書から昨年度の分野別のアクティブ・ラーニング対話集会の活動内容が報告された。

(2) 平成 27 年度の活動計画

資料①により、分野連携による対話集会の目的及び開催方針の説明が説明され、対話集会の進め方について意見交換された。

3. 対話集会の目的、計画、進め方などについて

学生の主体性を引き出し、伸ばす授業が求められることから自ら問題を発見し、答えを見出し実践できる力を育むアクティブ・ラーニングについて、昨年度は分野ごとにアクティブ・ラーニングの対話集会を開催したが、昨年度の対話集会ではアクティブ・ラーニングのイメージ共有にとどまり、工夫・改善などの意見交換に至らなかった。

そこで今年度は、「対話を通じて課題を発見し、課題解決に向けた学びを主体的・協働的・創造的に展開していくアクティブ・ラーニングの手法とそれを実現していくための授業運営の工夫」、「組織的に推進していくため教学マネジメントの工夫」について対話集会を通じて考察を行うこととしている。

- ・ 本年度の対話集会は、分野連携で 9 のグループ編成で行うこととしており、社会福祉学・社会学・統計学グループを 1 グループとして分野連携で対話集会を開催したい。
- ・ 分野連携の対話集会のねらいは分野共通のテーマを探してアクティブ・ラーニングを考えるのではなく、各分野の視点、各分野の教員の知見からテーマを検討すること。
- ・ 第 1 回委員会で開催方針を検討し次回は意見交換のテーマ、話題提供、進め方の詳細プログラムを作成、12 月中に対話集会を開催したい。
- ・ 話題提供は成功事例ではなく、うまくいかなかった点、失敗例も含めて話題提供し意見交換を行う。
- ・ 参加した先生が何か得るものを持って帰り、即授業に反映したいいただきことがねらいである。
- ・ 意見交換のシナリオ設定は、話題提供の内容にとらわれず当日考察すべきテーマについて

て流れを予測して検討し、全体の司会及び意見交換を総括する担当者1名、テーマ別の進行役3名以内を予め決めて実施する。

- ・ 総括ではテーマについて確認ができた点、確認が進まなかった点、工夫または改善の方向性について大まかに整理する。

4. 話題提供や意見交換のテーマなどについて委員の意見

- ・ 社会福祉学教育では資格中心のカリキュラムが中心になり、初年次において以下にモチベーションを向上させるかが課題になっている。
- ・ 資格中心の教育では（仮称）職業専門大学と4年生大学の違いが問われる。教養教育を含めた、リベラルアーツの学士力が重要になる。
- ・ 社会学、社会統計学、社会福祉学なもともと1つのかたまりでやっていたが今は資格重視で総合的な学びになっていないことが問題である。
- ・ 統計学は、統計学者を育てるのが目的ではなくそれぞれの分野で必要な統計の力をつけるのが目的でこのような授業改善やアクティブ・ラーニングが課題になる。
- ・ 新しい指導要領の新入生に対応した学位プログラム、質保証の在り方が社会から求められてくる。そのための授業改善やアクティブ・ラーニングの在り方を模索している。
- ・ 質保証のためのアクティブ・ラーニング（分野連携に共通する学士力を確認）の中で、社会福祉、社会、統計の各分野の課題を背景に対話集会の方向性を検討できるのではないか。
- ・ 学内のFD研修でSMSを活用したアクティブ・ラーニングが紹介されたが、学生の活動の幅を広げ、自主性を引き出せることがわかり大いに刺激を受けた。
- ・ 産官学連携を通じて、SMSなどのICTや定量的な問題解決の技術を活用し、新しい社会課題をテーマに一緒に何かを作り出していくアクティブ・ラーニングが求められている。
- ・ ソーシャルメディアは仲間内で使うツールと捉えており、教員の負担もかかるので授業で活用するには適していないと考えている。
- ・ 対話集会では、学生に主体性を持たせる教育と、リベラルアーツと専門知識の総合的な能力育成のどちらに焦点をあてるのか。
- ・ 社会で対応していけるためには、アクティブ・ラーニングによる主体的に活動できる能力、コミュニケーション力の育成が必要で、授業科目とは別の総合科目におけるアクティブ・ラーニングを提案してはどうか。
- ・ マナー教育も含めたSNSの活用について、社会的にどういう意味があるのか話題提供を聞いてみたい。
- ・ 学生が自分で考え、行動できる。これをどう育成するかが大学の使命である。社会調査実習等を通じて4年間でどう育てるのが課題である。
- ・ 何でアクティブ・ラーニングが必要なのを考えると「学びの目的が不明確、主体的学びの意識の無い学生に目的を持って主体的に学ばせる」、「10年後の変化、社会の流動性に対応できる柔軟な力」を持たせることではないか。
- ・ 社会学は解の無い学問であり、徹底的に社会の現象をディスカッションして考えさせることが必要。そのための地域連携プログラム、キャリア開発プログラムを行っている。
- ・ 社会の変化を読み、対応していける能力を育成するために、リーダーシップを学ばせることは重要である。
- ・ 社会学、統計学、社会福祉学合同の新しい科目を創るのは難しいが、分野横断の連携した学びの中でこのような統合的な学びの場ができるのではないか。
- ・ 地域社会や産業界と連携した知識・技能・態度の活用を目指したアクティブ・ラーニングを通じて分野横断型の学びができるのではないか。

- ・ 自分の専門分野を様々なものに結び付けた教育ができる教員がいる一方で、自分の専門だけで総合的に他と結びつけていくことが苦手な教員もいる。
- ・ 分野連携では、高齢化など社会全体に係わるようなテーマ設定のもとで、アクティブ・ラーニングの方法やICT活用について検討していけるのではないか。
- ・ 学生達が10年後自分たちが生きている世界・未来をどういうふうと考えていくのか、そのためにはどんな学びをしていくのか、そのような方向性で考えられればよいと思う。
- ・ 対話集会では、各教員の専門教育の中でアクティブ・ラーニングを実現するとしたらどのような方法があるのか、自分の問題として考えてもらうことがねらいとなるのではないか。
- ・ 各分野の知識や技術を持ち寄ると何ができるのかを検討し合う課題解決型の教育になるのではないか。
- ・ 社会に出て幅広い視野を持って活躍できるよう、統計、社会、福祉がどうやって結びつくより良い生活が見えてくるのかを学生に気づかせる授業を考えていくべき。
- ・ 社会福祉分野の就職では5分の3は違う職種に進んでいる。さまざまな分野で社会福祉で学び、培ってきた知識を活用して社会に貢献できる力を付けさせることが課題となってくる。
- ・ 分野横断的な学びは、例えば社会福祉系の学が社会学や統計学の知見を学び、統合的に社会で活躍できる力を付ける機会になると思う。
- ・ 幅広い参加者の意見を活かすため、参加者に事前に「あなたの専門・授業ならどんな方法が考えられますか」考えてきてください等、問いかけてはどうか。
- ・ 大学に何のために入学したのか、目的意識を持たせ、気づきを与える初年次教育が重要である、2年、3年になってからでは遅い。
- ・ 幅広い視野と知識・技能・態度の活用ができることが社会で求められており、社会福祉、社会、統計の分野連携でおもしろい新しいチャレンジができるのではないか。その際、法律学などで検討しているフォーラム型の授業も参考になる。

時間の関係もあり最終的な取りまとめには至らなかったが、意見を集約し以下の内容について第2回委員会で検討することにした。

<アクティブ・ラーニング目>

- ・ 知識の定着・確認・活用・創造に向けたアクティブ・ラーニング
- ・ 知識を体系化し考えること訓練するアクティブ・ラーニング
- ・ フォーラム型授業によるアクティブ・ラーニング

<教学マネジメント>

- ・ アクティブ・ラーニングを組織的に推進してくための組織的取り組み

<意見交換の形式>

- ・ 参加者と一緒に考えるパネルディスカッション

IV. 今後の予定

次回は11月14日(土)17:00から合同委員会を行い、対話集会の開催要項を検討することにした。また、対話集会のテーマ、取り組み事例、意見発表の話題について持ち寄っていただき、開催要項をとりまとめることにした。